



パネル展示会

# モダン 名古屋 さいけん

リアルとデジタルの往還

## 展示の記録

# 開催概要

名称 展示会「モダン名古屋さいけん—リアルとデジタルの往還—」  
主催 共創まちづくり研究推進事業「名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生」・名古屋市立大学 佐藤美弥研究室  
共催 名古屋市市政資料館  
会場 名古屋市市政資料館 3階 第5展示室  
会期 2026年3月7日（土）から3月15日（日）まで  
休館日 2026年3月9日（月）  
時間 9：00～17：00

# 謝辞

この展示会を開催するにあたり多くの方々にご協力を賜りました。記して謝意を表します。

・連携機関

名古屋市市政資料館 名古屋市鶴舞中央図書館 名古屋市博物館

・調査および解説の執筆

名古屋市立大学人文社会学国際文化学科 ICTプロジェクトA（2025年度） ICTプロジェクトC（2023・2025年度） ICTプロジェクトD（2024年度）

国内フィールドワークE（2025年度） 佐藤ゼミ（2023～2025年度） 以上の授業を履修した学生のみなさん

このほか、多くの方々のご協力を賜りました。

この展示会は、名古屋市立大学共創まちづくり研究「名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生」の研究成果の一部です。本研究は、名古屋市立大学共創まちづくり研究推進費2403420の助成を受けたものです。

「名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生」

研究代表者 佐藤美弥（大学院人間文化研究科）

研究分担者 やまだあつし（大学院人間文化研究科） 小川泰弘（大学院データサイエンス研究科） 川戸貴史（大学院人間文化研究科）

展示企画 佐藤美弥 展示補助 やまだあつし 杉山千尋

# 凡例

- ・本書は、展示会「モダン名古屋さいけん—リアルとデジタルの往還—」の展示内容の記録です。展示パネルの内容を掲載していますが、本書にまとめるにあたってレイアウトや解説を変更、再構成している場合があります。
- ・本書に掲載している解説文の執筆、掲載写真の撮影は、研究代表者、研究分担者のほか、名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科が開講する関連授業を履修した学生の協力を得て行いました。
- ・表紙の画像は以下のとおりです。「絵はがき 第十回関西府県連合共進会 噴水塔」個人蔵、「絵はがき 御大典奉祝名古屋博覧会 大礼館」個人蔵、「絵はがき 豊国神社第二鳥居(中村公園)」名古屋市博物館蔵、「絵はがき 栄町地下鉄入口・名古屋」名古屋市博物館蔵。

# 主要参考文献

『中村区誌』中村区制施行50周年記念事業実行委員会、1987年／『名古屋博覧会総覧』名古屋勤業協会、1929年／朝日新聞社編『朝日新聞名古屋本社五十年史』朝日新聞名古屋本社、1985年／財団法人名古屋市みどりの協会編『ふらら』第4号、名古屋市みどりの協会、2009年／佐藤美弥ほか「デジタル化資料を用いた戦後期名古屋地域史研究の試み—国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料による」『人間文化研究』41、2024年／佐藤美弥「ローカル人文知の応用によるHIFコンテンツの活用—国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料を素材に」『デジタルアーカイブ学会誌』9(s2)、2025年／柴垣勇夫編著『中村区まち物語』風媒社、2019年／新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第6巻』名古屋市、2000年／新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第7巻』名古屋市、1998年／宮原鏡ほか編『名古屋、アジアに出会う』図書出版みぎわ、2025年／名古屋タイムズアーカイブズ委員会編『昭和イラストマップ—名古屋なつかしの商店街』風媒社、2014年／横地清『中村区の歴史』愛知県郷土資料刊行会、1983年／横地清『中村区歴史余話』中日出版社、1992年

## パネル展示会

## モダン名古屋さいけん リアルとデジタルの往還 展示の記録

編集 佐藤美弥

発行 名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生・  
名古屋市立大学佐藤美弥研究室

発行日 2026年3月31日

# ごあいさつ

この展示会「モダン名古屋さいけん——リアルとデジタルの往還」は、「モダン」つまり、明治時代以降の名古屋の都市の姿を写したイメージを「さいけん」(再見=もういちど見る/細見=くわしく見る)してみようという試みです。

名古屋市立大学が、市との連携のもと実施する共創まちづくり研究「名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生」(研究代表者:佐藤美弥)では、人文学にデジタル技術を応用しようとするデジタル・ヒューマニティーズの考え方のもと、名古屋の身近な歴史・文化を知ることのできる絵はがきや新聞記事などの資料をデジタル化し、デジタルアーカイブで公開したり、テキスト分析をしたりする試みを行いました。本展示会は、この研究プロジェクトの成果を紹介するものです。

デジタル化したイメージをパネルで紹介し、またパネルに掲載しているQRコードをスマートフォンのカメラなどで読み込んでいただくと、より詳しい情報がわかるインターネット上のデジタルアーカイブにアクセスできるようにしています。リアルなパネル展示とデジタル空間のデジタルアーカイブをいったりきたりしながら楽しんでいただければと思います。

この展示会で展示している資料のデジタル化や解説の執筆の作業の一部は、名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科が開講している「ICTプロジェクト」等の授業の履修生の協力により行われました。また、本研究は現在も進行中ですので、コンテンツには開発中のものも含まれています。

この展示会が、名古屋の歴史や文化にふれていただき、理解を深めていただく機会となれば幸いです。

2026年3月

名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生  
名古屋市立大学佐藤美弥研究室

# 会場風景



# 絵はがきでみる名古屋の博覧会

## 鶴舞公園の誕生——第十回関西府県連合共進会

### 第十回関西府県連合共進会とは

関西府県連合共進会は1883年（明治16）に大阪府の主催により1府16県が参加してはじまった。その後、3年おきに持ち回りで開催された。第十回関西府県連合共進会は1910年（明治43）に愛知県名古屋市で開催された。会期は3月16日から6月13日までの90日間が設定され、鶴舞公園を会場として開催された。

### 鶴舞公園の開園

第十回関西府県連合共進会の会場となった鶴舞公園は1909年（明治42）11月19日に名古屋市第1号の公園として誕生した。1905年（明治38）に着工した精進川（現新堀川）の改修工事が出た土を、当時は御器所村の一部であった水田などの埋め立てに使用し、公園が造成された。そこを会場に愛知県が主催する共進会を誘致し、その後公園を整備する計画であった。そして、1909年（明治42）10月に土地が名古屋市に編入され、翌月に開園したのである。公園には、共進会の展示館だけでなく、待賓館、噴水塔、奏楽堂なども建設された。噴水塔と奏楽堂は共進会終了後に名古屋市に寄附され、鶴舞公園の象徴的な存在となった。噴水塔と奏楽堂はいずれも名古屋高等工業学校（名古屋工業大学の前身）教授の鈴木禎次が設計したものである。

### 参考文献

新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第6巻』名古屋市、2000年  
財団法人名古屋市みどりの協会編『ふらら』第4号、名古屋市みどりの協会、2009年



### 〔第十回関西府県連合共進会 エンボス加工〕 1910年 個人蔵

この絵はがきは、「正門」を右斜め前側から撮影した画像を使用しており、柄や模様を浮かせ上げる技術であるエンボス加工を施している。左下の日本地図では、共進会に参加した3府（東京府・京都府・大阪府）と26県が色付けされ、その上から共進会の記念印が押印されている。桐の花、三つ葉葵、木瓜紋の模様は、それぞれ豊臣秀吉と徳川家康、織田信長の戦国三英傑を表す。

### 第十回関西府県連合共進会 噴水塔 1910年 個人蔵

噴水塔は大理石と岩を配して、和洋折衷のデザインにし、全体的にローマの様式を取り入れている。写真は本館の前方、噴水塔の周囲に芝があるところから撮った。和服にハットをかぶり、トランクをもつ男1人がたたずんでいる。遠方には鉄道営業所が映され、右側の建物は岐阜県売店である。共進会の本館の正面に築造され、現在は鶴舞公園のシンボルとなっている。地下鉄鶴舞線の建設工事のために1973年（昭和48）一旦撤去され、1977年（昭和52）に復元した。

現在のようす（2024年撮影）



### 第十回関西府県連合大共進会 奏楽堂 1910年 個人蔵

奏楽堂は野外音楽堂である。周囲には多くの人が集まっている。奏楽堂の床下は演奏者の休憩場となっていた。1934年（昭和9）に台風の影響にあい、改築された。現在の建物は、1997年（平成9）に復元されたものである。写真の遠景にはアサヒビールの売店、右側には名古屋新聞気象塔がみえる。



(堂楽奏) 會進共大合縣府西關回十第



現在のようす（2024年撮影）

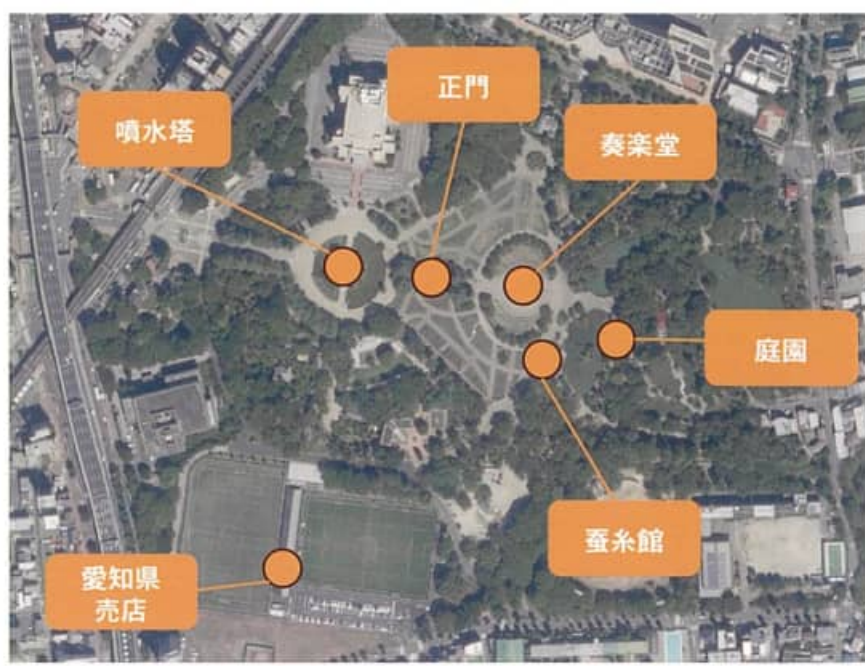


QRコードを読み込んで、  
デジタルアーカイブへ!



### 第十回関西府県連合共進会(蚕糸館) 1910年 個人蔵

蚕糸館の正面から撮った写真。左上に薄い紫の共進会の記念スタンプがある。下部に紺色のタイトルと英語のタイトルがある。屋根と正面のふたつの入口の前に日本の国旗を飾っている。共進会で設置された蚕糸館は明治時代における愛知県の蚕糸産業の繁栄を反映している。従来の共進会では農業館・工業館の両方に分けて出品されていた蚕糸業関係の展示を独立させて蚕糸館に集めた。蚕糸館の中では蚕糸の参考品を陳列し、参考資料として公衆に観覧させた。



全国最新写真シームレス (2020年撮影) (地理院地図より) を加工

### 第十回関西府県連合大共進会(愛知県売店) 1910年 個人蔵

愛知県の売店は名古屋城を模して木造で造られている。1階と2階は売店となっていて、天守の3階から5階は休憩室として使われ、最上階の6階もまた売店とされた。この建物は各府県の売店の建物の中でも最大で、飲食店も数か所併設されている。噴水塔から建物の全体が見える位置にあり、訪れた人に大きな印象を残したと考えられる。



(複製) 愛知府県共進会館



THE GARDEN, IN COVA. EX. AT NAGOYA. 園庭を建共合聯府県西關十第

### 第十回関西府県連合共進会 庭園 1910年 個人蔵

写真中央の胡蝶ヶ池に掛かる橋が鈴菜橋で、奥に見える建物は特許館(中央)および本館(左)である。鈴菜橋は作られた当初は群馬県日光市の二荒山神社の神橋を模した木造の太鼓橋であったが、現在は鉄筋コンクリート製の橋に建て替えられている。池は埋め立てられて再度復元されたため、厳密には当時の姿と異なっている。



現在のようす (2024年撮影)

### 第十回関西府県連合共進会 正門イルミネーション 1910年 個人蔵

共進会のメイン会場となる本館の中央には正門が配置されていた。本館正門は3か所に出入口を設けている。中央及び左方は改札を設け入口とし、右方を出口としていた。なお貴賓の訪問時は左方入口の改札口を撤去し貴賓用入口としていた。本館は木造の掘建造りであり、内外に漆喰を塗り、外壁には電球が多数設置され夜間はイルミネーションを行っていた。当初は会場照明として当時広く使用されていたガス灯を用いる予定であったが、同年に運転を開始した名古屋電燈(現中部電力)長良川発電所から電気が引かれ、照明は電気によるものとなった。



正門のイルミネーション 正會連共合聯府県西關十第

# 絵はがきでみる名古屋の博覧会 「昭和」のはじまり——名古屋博覧会

## 博覧会と名古屋

名古屋博覧会より前、1910年（明治43）に第10回関西府県連合共進会が愛知県で開催された。これに際して、名古屋市最初の公園として1909年（明治42）に鶴舞公園が開園、共進会の会場となった。

そして1927年（昭和2年）、昭和天皇が特別大演習のために名古屋を訪問し、産業振興について言及したことをきっかけに1928年（昭和3）に「御大典奉祝名古屋博覧会」が開かれることとなった。

## 「御大典」とは

「御大典」とは、天皇の即位に関する重要な儀式や典禮を指す。特に天皇の即位の礼や大嘗祭など始めとする一連の儀式を大典と呼ぶ。

大正天皇が崩御したのは1926年（大正15）12月25日であった。ただちに昭和天皇が践祚（皇位の継承）を行い、慣例により約1年間の諒闇（喪中）を経過したのち、1928年（昭和3）11月に皇位の継承を内外に宣言する即位の礼が行われた。「御大典奉祝」とは、この昭和天皇の即位を記念しているということを意味している。

## 名古屋博覧会の概要

さきに述べたように、1927年（昭和2）に昭和天皇が名古屋を訪れたことをきっかけに、一大博覧会を開催し、昭和天皇の即位を祝うと同時に産業振興をはかるという企画がもちあがった。

1928年（昭和3）1月に皇族の賀陽宮を総裁とし、愛知県知事、商工会議所会頭を副総裁、名古屋勲業協会会長でもあった名古屋市長を博覧会長として、全国に賛同を求めた。

博覧会は、1928年（昭和3）9月15日から11月23日までの70日間、鶴舞公園を会場に開催された。博覧会に出品されたものは、日本の支配域から広く募られ、農林漁業から、工業製品、デザインや美術工芸品まで幅広い分野にわたるものであった。出品物は、非売品もあったが、すぐを買うことができたり、予約できるものもあった。すぐれた出品物はメダルが授与され表彰された。

出品希望者にブースが貸し出されたほか、自費でパビリオンや売店を建設することもできた。主催者により名古屋駅前に奉祝門が建設されたほか、鶴舞公園の会場内に奉祝塔、本館のほか、機械館、電気館、農林館などジャンル別のパビリオンが建設された。また大礼館、国防館、演舞場、日光館、小鳥館、歴史館などテーマ別のパビリオンもあった。

当時中央本線に鶴舞駅はなかったため、博覧会期間中に特別に鶴舞公園駅が開設され、また博覧会郵便局やJOCK（日本放送協会東海支部）のラジオ館も設置された。

参考文献 『名古屋博覧会総覧』名古屋勲業協会、1929年



## 絵はがき 正門 1928年 個人蔵

名古屋博覧会の正門。博覧会開催中は多くの来場者で賑わった。木の骨組みを基礎とし、漆喰塗りで仕上げられている。間口16間（約29m）、奥行き10尺（約3m）、中央部の高さは55尺（約17m）と、大規模な造りだった。現在では、正門のあった位置にJR中央本線のガードがある。



現在のようす (2025年撮影)



## 絵はがき 本館正面 1928年 個人蔵

本館はドイツ表現派の建築様式を採用している。総建坪3120坪（開催中の増築分約500坪を含む）、上から見ると田の字形の建築物である。内部では、本館中心部に愛知県を含む名古屋の出品物を陳列し、館内東部には東京を含む東日本の出品物、西部には大阪を含む西日本の出品物が陳列されていた。



現在のようす (2025年撮影)



## 絵はがき 飛行機上より見たる会場全景 1928年 個人蔵

飛行機上から撮影した博覧会会場の全景。鶴舞公園内の南部と東部を使用し、北部は公園として一般利用ができるようにした。会場は公園南部の運動場を中心に位置し、本館、機械館、電気館、消防詰所、福引場、事務所、迎賓館、飲食店を設置した。会場東部は公園東端の龍ヶ池から西は熊澤山、北は名古屋高等工業学校の前までを範囲として娯楽館（余興館）、朝鮮館、歴史館、教育館、変電所、飲食店を点在させた。その他の施設としては、聞天閣に貴賓館、北側の吉田山付近に大礼館を建設した。東端のお花畑には美術館を設け、博覧会の成功を祝う施設とした。さらに塔に付属する形でコロネード（列柱）16本を配置し、荘厳な雰囲気を出した。



QRコードを読み込んで、  
デジタルアーカイブへ!



**絵はがき 本館内部**  
1928年 個人蔵

本館では各府県からの名産品を展示販売していた。各地の名産品が集まり、それぞれの府県を代表するように各ブースに意匠をこらして並べられていたようだ。写真に写っているのは日本毛織の展示物であり、布や毛糸の展示をしている。また右側に見えるのは名古屋綿布工業組合のブースであり、左側は後藤銅器店のブースである。



**絵はがき 機械館内部**  
1928年 個人蔵

本館の西側に並列し、幅14.5m奥行100m総坪444坪の掘立式垂鉛葺の建物である。内部は屋根裏が布張りになっている。機械館ではオートバイや旋盤、精米機などの工業製品が展示された。絵はがきには豊田自動織機製作所や豊田式織機株式会社の機械が展示されている様子や洋服を着た2の男性がうつる。



現在のようす (2025年撮影)

**絵はがき 子供の国部** 1928年 個人蔵

鶴舞公園内の児童遊園に設備を設けて、子供のための体育運動遊技場として設置された。会場本館から会場東部へと観客が足を運ぶ間に位置しており、ほかの施設と比べて華やかで異なる雰囲気をもった施設であった。広さは2500坪で周りは樹林でおおわれていた。入場門からすぐにゾウの像が設置されていた。また、中央には飛行機塔があり、いくつかの駅が設置され、その間を行き来する子供汽車などがあった。



**絵はがき 電気館内部**  
1928年 個人蔵

電気館は主に8種類に分けて電気に関するものが展示されていた。企業ごとにブースに分かれており、手前右に見えるのが高岳製作所(現、東光高岳)のブースである。



現在のようす (2025年撮影)



**絵はがき 歴史館内部**  
1928年 個人蔵

歴史館は協賛会によって建てられものである。歴史館は12区画に分かれており、それぞれ人形と背景で時代を表現した。この写真の場面は賤ヶ嶽の七本槍であり、中央に配置されている馬にまたがっている武将は加藤清正である。



**絵はがき 歴史館内部**  
1928年 個人蔵

満蒙館は、関東庁と南満洲鉄道株式会社が、満洲や蒙古(モンゴル)の産業を紹介するために設置した特別展示館である。出展は順調とは言いが難かった。満蒙館は朝鮮館や台湾館と並んで設立された。しかし、後者2つが日本の植民地であったがゆえに、「植民地のように見える」とのことで汪南京国民政府公使から抗議があった。一方で、「満蒙館は出品内容として満蒙の産業などの状態を紹介してあるのみで決して侮辱するものではないし、植民地のような態度で取り扱ってはいない」として問題にはならないとの弁明により、そのまま出展された。  
(『名古屋新聞』1928年9月26日)



全国最新写真シームレス (2020年撮影) (地理院地図より) を加工

# テキストマイニングから歴史の細部を明らかにする 名古屋の新聞と普通選挙法

## 普通選挙法

1890（明治23）年に第1回議会在開会した大日本帝国議会では、貴族院と衆議院の2院制を採用し、衆議院議員は国民からの選挙で選ばれていた。ただし、選挙権は男子のみ、かつ一定額以上の納税者のみ投票を認める制限選挙であった。この納税額制限をなくしたのが「普通選挙法」（大正14年法律第47号）である。第50回議会の会期終了前日、1925（大正14）年3月29日に成立した。第50回議会では「治安維持法」（大正14年法律第46号）も3月19日に成立している。当時の首相は、尾張（名古屋）藩士の子で憲政会総裁でもあった加藤高明（1860（安政7年）年1月2日生まれ、1926（大正15）年1月28日没）である。

## 1920年代名古屋の新聞

今日、名古屋を代表する新聞は『中日新聞』であるが、同紙は戦時統制により、1942（昭和17）年に当時の名古屋の二大新聞であった『新愛知』と『名古屋新聞』とが、合併創刊したものである。合併時点では『中部日本新聞』であった。『新愛知』は、自由民権運動の闘士であった大島宇吉らが、1886（明治19）年創刊、1888（明治21）年から『新愛知』と改題し、日刊新聞となる。自由民権運動の流れを継ぐ勢力が1900（明治33）年に立憲政友会を結党すると、『新愛知』は同党を支援する新聞と目されるようになった。『名古屋新聞』は、小山松寿によって1906（明治39）年に創刊された。小山が、1916（大正5）年の憲政会結党に参画したため、『名古屋新聞』も憲政会を支援する論調を張った。



加藤高明肖像  
『近世名士写真 其一』1935年より  
国立国会図書館デジタルコレクション

## 2025（令和7）年度「ICTプロジェクトA」授業

名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科は「ICTプロジェクト」の科目群を設置し、学生たちとデジタルヒューマニティズの実践を試みている。2025（令和7）年度「ICTプロジェクトA」授業は、1925（大正14）年2月から4月にかけて、すなわち「普通選挙法」成立前後の『新愛知』と『名古屋新聞』の記事のテキストマイニングを行った。これにより、『新愛知』が政友会系、『名古屋新聞』が（加藤高明首相の与党である）憲政会系という先行研究の当否、「普通選挙法」と「治安維持法」との関係、同時期に新聞が注目していた他の政策の有無、を分析することとした。この時期は政友会が分裂した時期でもあった。前年（1924年）1月、清浦奎吾内閣への対応を巡り、立憲政友会から過半の衆議院議員が離党し政友本党を結成していた。同年5月の第15回衆議院議員選挙で愛知県下各選挙区の当選議員中、政友本党の議員はいても、立憲政友会の議員はいなかった。この時期における『新愛知』の立ち位置は、特に分析する価値がある。授業は、7月に2日間集中で行った。教員側で、OCRでデジタル化済の新聞記事テキストデータと、KH Coder（テキストマイニングのツール）を用意したが、OCRは誤認識も多く、KH Coderが処理できる形にテキストデータを整形する必要もあった。よって、1日目授業は全ての時間をKH Coderを使うための事前準備に費やした。2日目授業はKH Coderを使ったテキストマイニングを行い、最後に各班に分かれて発見したことをプレゼンテーションした。



ICTプロジェクトA授業風景（下段とも）  
2025年 やまだあつし撮影





# 焼け跡からの再出発——カラー写真で復元する戦後の名古屋 モージャー氏撮影写真資料とは

モージャー氏撮影写真資料は、連合国軍総司令部（GHQ）文民スタッフであったロバート・V・モージャーが、1946年（昭和21）4月から翌年1月まで日本に滞在した際に各地で撮影した304点のカラーズライドである。

2008年（平成20）に国立国会図書館に寄贈され、2017年（平成29）に国立国会図書館デジタルコレクションで公開された。資料には、番号、被写体を端的に示す名称と撮影地が付されている。

モージャー氏撮影写真資料は、敗戦間もない時期の日本各地を鮮やかな色彩で撮影した写真である。著作権保護期間が満了している、パブリックドメインで活用しやすいという理由から、公開当初から多くの反響があった。撮影場所が明らかになっていない写真の撮影地の調査などが盛んに行われている。また、博物館展示や出版物の図版などに広く利用されている。

参考文献  
佐藤美弥「ローカル人文知の応用によるIFコンテンツの活用：国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料を素材に」『デジタルアーカイブ学会誌』9(s2)、2025年

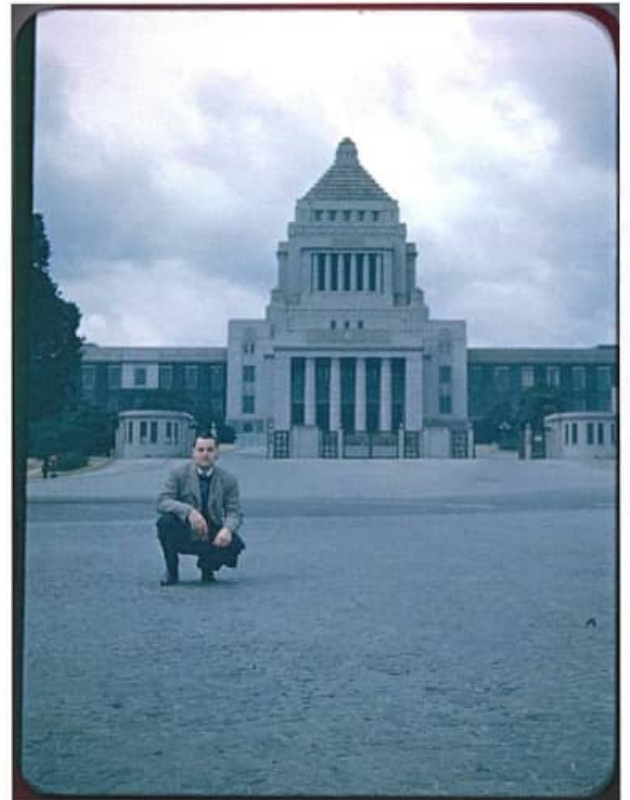


## 二重橋前のMosier氏（東京都）

1946～1947

国立国会図書館デジタルコレクション

皇居二重橋前で撮影された1枚。



## 国会議事堂とMosier氏（東京都）

1946～1947

国立国会図書館デジタルコレクション

国会議事堂前で撮影された1枚。  
国会議事堂の両翼部分は空襲の標的となるのを防ぐ防空迷彩のため、黒く塗られている。



## 原爆ドーム（広島県産業奨励館）と 焼け跡風景（広島県）

1946～1947

国立国会図書館デジタルコレクション

広島県産業奨励館は、1915年（大正4）に建設された県立の物産展示場であった。1945年（昭和20）8月6日にほぼ直上から原子爆弾が投下され、破壊された。戦後は原爆被害の惨状を伝える象徴的な建造物となった。

焼け跡からの再出発——カラー写真で復元する戦後の名古屋

# 名古屋の地域資料としてのモージャー氏撮影写真資料

モージャー氏資料をみると、すぐに名古屋で撮影された写真がたくさん含まれていることがわかる。

国立国会図書館デジタルコレクションが提供している情報により撮影地の割合を検討すると、2023年時点のデータで304点のうち「場所不詳」が126点で約41%を占めるが、推定されたものも含め具体的な地名が付されているもので最も多いのは愛知県で、68点（うち59点が名古屋市）で約22%であった。さらに「場所不詳」の資料の撮影地比定を行ったところ、76点、25%が愛知県で撮影されたものと考えられることがわかった。この数字は、調査を進めることでさらに大きくなる可能性がある。

このようにモージャー氏撮影写真資料は愛知・名古屋の地域資料としての特徴を持っている。

参考文献 佐藤美弥「ローカル人文知の応用によるHPコンテンツの活用：国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料を素材に」『デジタルアーカイブ学会誌』9(s2)、2025年

## モージャー氏撮影写真資料が撮影された場所の割合

撮影地	実数	割合
場所不詳	116	38.2%
<b>愛知県</b>	<b>76</b>	<b>25.0%</b>
東京都	40	13.2%
京都府	18	5.9%
広島県	17	5.6%
神奈川県	13	4.3%
岐阜県	11	3.6%
山梨県	6	2.0%
大阪府	4	1.3%
奈良県	3	1.0%
合計	304	

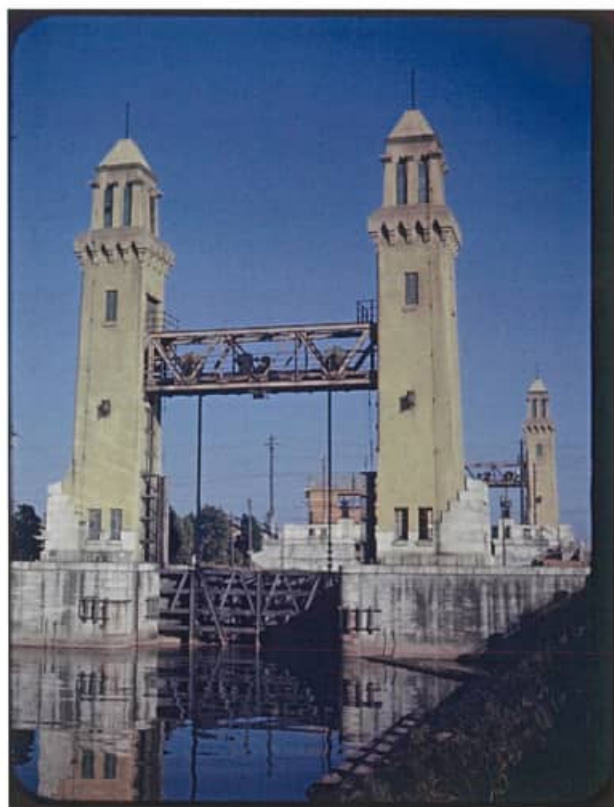
国立国会図書館デジタルコレクションが提供しているメタデータによる  
佐藤美弥作成



空襲で被災した松坂屋（愛知県）1946～1947

国立国会図書館デジタルコレクション

南大津町の松坂屋店舗は、1925年（大正14）4月に新築されたものである。地上6階、地下2階の巨大建築であった。1945年（昭和20）3月19日の空襲で全焼し、この写真が撮影された当時は復旧の途上にあった。



松重閘門（こうもん）（愛知県）

1946～1947

国立国会図書館デジタルコレクション

松重閘門は中川運河と堀川を連絡する閘門（水の高さが異なる水路のあいだを船が通行できるようにする施設）で、1930年（昭和5）に完成した。1976年（昭和51）に閘門としての役割を終え、1986年（昭和61）に市の指定文化財となった。



モージャー氏撮影  
写真資料を活用した  
デジタルアーカイブ  
「戦後の名古屋」

# 名古屋駅遠望



## 街並み風景(名古屋駅等鳥瞰) (愛知県)

1946~1947

国立国会図書館デジタルコレクション

広小路通南側にある朝日ビルの塔屋から西方、堀川以西名古屋駅周辺を撮影したものと推定できる。現在のヒルトン名古屋28階からは、同様の範囲の写真を撮影することができた(右写真)。画面中央の大きなクリーム色のビルが名古屋駅、左側の幅の広い通りである広小路通には市電(路面電車)が走る。広小路通南側の壁面が黒色に塗装された建築は1933年(昭和8)時点では三井物産のビル、画面左手前の多角形の塔がある建物は静岡銀行と思われる。その奥、柳橋交差点との間に黒色で間口の広い石原商店がみえる。



## ヒルトン名古屋から名古屋駅方向

2022

佐藤美弥撮影

朝日ビルからやや東側に位置するヒルトン名古屋の28階から撮影した写真である。広小路通りの道筋はそのままだが、一帯は高層ビルが林立し、戦後の風景とはまったく異なったものとなっている。遠景の養老山地の稜線は今も変わらない。

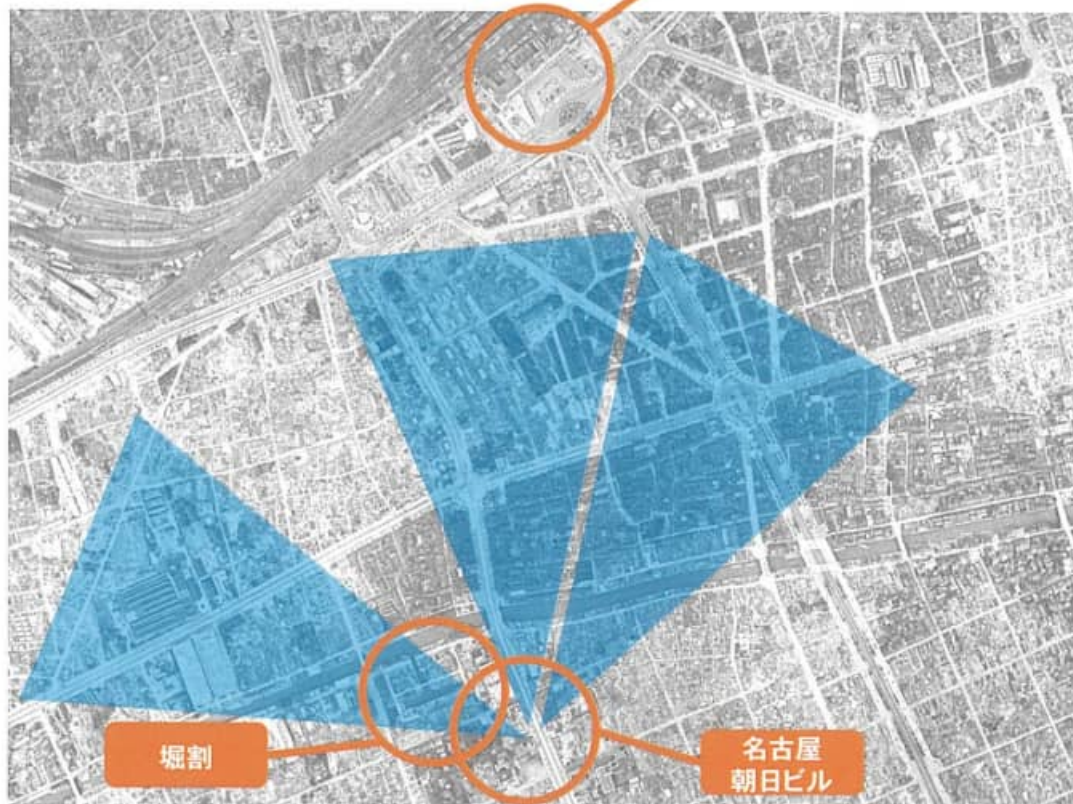
参考文献  
佐藤美弥ほか「デジタル化資料を用いた戦後期名古屋地域史研究の試み：国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料による」『人間文化研究』41、2024年





名古屋駅

左:街並み(鳥瞰)(愛知県)  
中:街並み風景  
(名古屋駅等鳥瞰)(愛知県)  
右:街並み(鳥瞰)(愛知県)  
1946~1947  
国立国会図書館デジタルコレ  
クション



堀割

名古屋  
朝日ビル

写真中「街並み風景(名古屋駅等鳥瞰)」は、高所から画面中央に特徴的な国鉄名古屋駅を捉えられているので、東から西方を撮影したものとわかる。左に見える市電が走行する大通りは広小路通りで、交差点は柳橋交差点である。画面下部のフレーム外には名古屋の市街を南北に流れる堀川が流れているはずである。  
写真右「街並み(鳥瞰)」写真左「街並み(鳥瞰)」そして「名古屋観光ホテル(鳥瞰)」もまた同じ地点から撮影された一連のものと考えることができる。写真左には、近世の藩蔵にアクセスする堀割跡がみえるように南西を撮影したもので、写真右は北西を撮影したものである。

### 撮影範囲の推定図

1946年(昭和21)に米軍が撮影した空中写真に、上の3点の写真で撮影されている範囲を推定し、重ねた図。

出典:国土地理院空中写真(米軍撮影1946)を加工 ※方位は変更している



モージャー氏撮影  
写真資料を活用した  
デジタルアーカイブ  
「戦後の名古屋」



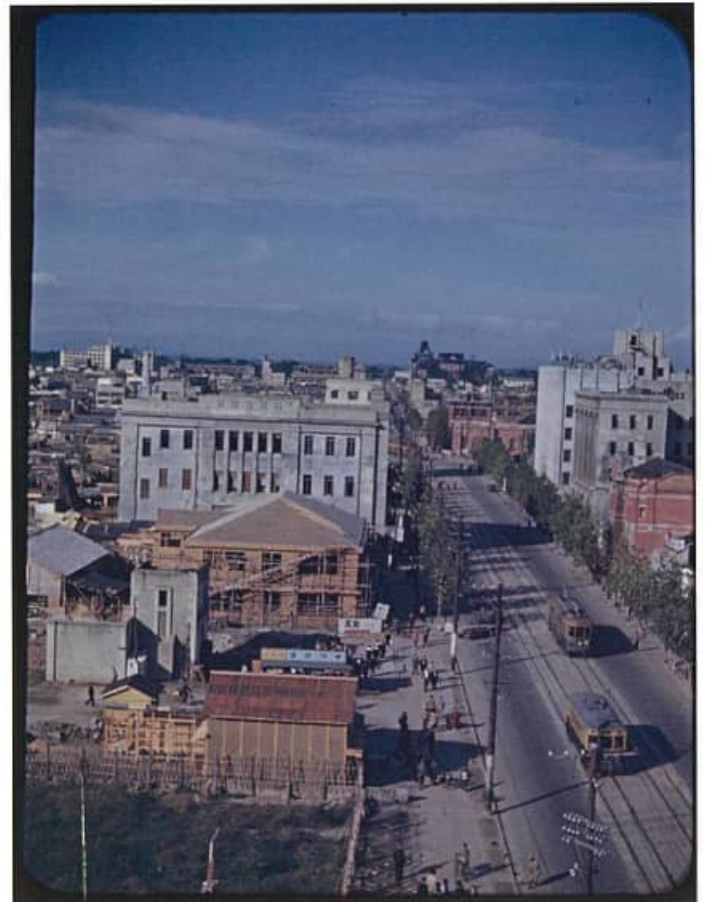
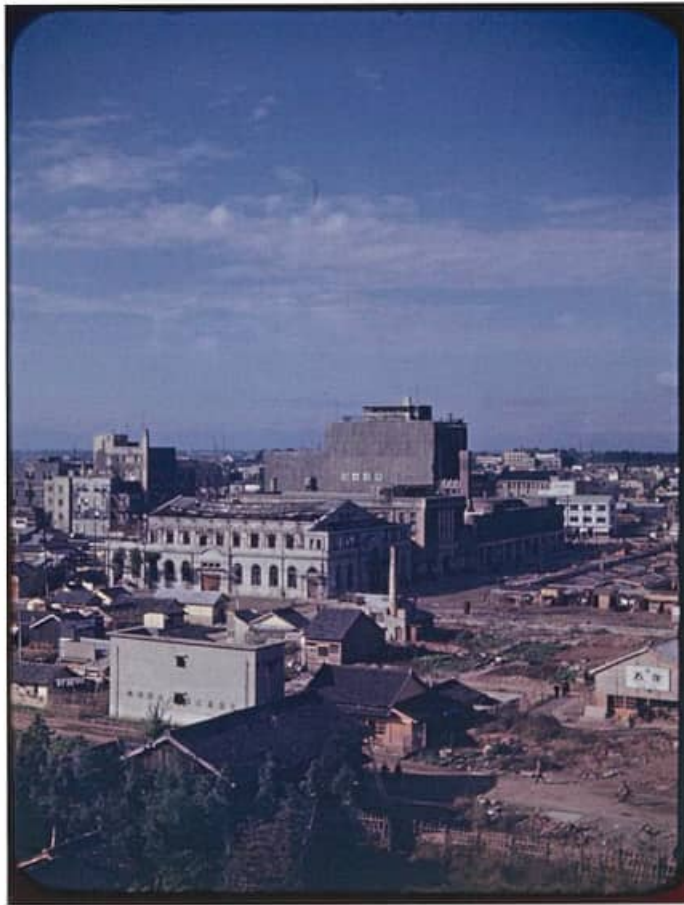
建物(愛知県)(名古屋朝日ビル)

1946~1947

国立国会図書館デジタルコレクション

上の写真3枚を撮影した場所は、この写真にうつる朝日新聞名古屋支社(名古屋朝日ビル)であろう。1935年(昭和10)11月に完成した名古屋市内で最も高いビルであった。石川純一郎が設計し、竹中工務店が施工した、地上6階地下1階のモダニズムのビルディングである。  
1969年(昭和44)に改築され、1988年(昭和63)に現在の朝日ビルに建て替えられた(『朝日新聞名古屋本社五十年史』)。

# 南大津通



左:街並み(丸栄名古屋公証人合同役場五金等鳥瞰)(愛知県)

右:街並み(愛知県庁名古屋市役所遠景鳥瞰)(愛知県)

1946~1947 国立国会図書館デジタルコレクション

右の写真は栄町交差点から南にのびる南大津通を南方から撮影したものである。撮影地点は中部配電の社屋の屋上であると考えられる(現在の天津通電気ビルの位置)。画面奥には愛知県庁舎と名古屋市役所庁舎が写っている。

南大津通東側を見ると、手前の赤レンガの外観の建築から小島電気商会、共済ビル、千代田生命ビル、広小路通を挟み北側に再び赤レンガの外観の日本銀行名古屋支店がある。西側には、写真中央の巨大な白いビルの伊藤銀行中支店(現三菱UFJ銀行)がある。伊藤銀行の南側には建設中の木造建築物があり、そこには「五金」と記された看板が設置されている。

左の写真は日本証券取引所名古屋支所(名古屋株式取引所から戦時統制により改組)を中央に写したものである。現在の名古屋証券取引所の位置と、右下に写る「五金」の位置から考えると、写真と同じ地点から撮影したものと考えられる。取引所の北側には工事中の丸栄百貨店が見える。また東側には、木造の小さな建物が密集している一画がある。これは、別の写真にもみえるマーケット「栄楽天地」である。



左:日用品店(オカヤ商店)

右:街頭風景  
(飲食雑貨店「五金」前)(愛知県)

1946~1947

国立国会図書館デジタルコレクション

「五金」は、少し後の1953年当時の地図によれば「洋装百貨店」として、「ビューティサロン」「食堂女雅美」「理髪」「パーマ」等を営業していた。

右の写真には五金の開店を知らせる看板が大きく写っている。上の写真では建築中であった五金が完成しているのである。看板には「高級食堂・特撰雑貨の店」と書いてある。

左の写真は、五金のやや南側で営業していた日用品を販売する商店である。戦後間もない時点では南大津通りの沿道でも木造バラックによる商店が営業していたようすがわかる。

焼け跡からの再出発——カラー写真で復元する戦後の名古屋  
**栄町交差点周辺**



**Headquarters Fifth Air Force  
 (名古屋日本徴兵館) (愛知県)**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

広小路通と本町通の交差点北西角にあった名古屋日本徴兵館のビルを撮影した1枚。同ビルは連合国軍に接収され、第5空軍の司令部として使用された。右には中村百貨店、左には名古屋銀行の建物がみえる。



**着物姿の女性 (愛知県)**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

左奥に赤れんがの日本銀行名古屋支店の建物がみえるので、栄町交差点の南東角を撮影したものと思われる1枚。1947年(昭和22)の正月であろうか、はなやかな和服姿の女性の姿が多く撮影されている。



**左: 飲食店街と通行人 (場所不詳)**  
**右: 飲食店(楽天)店頭 (場所不詳)**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

資料名称は「場所不詳」となっているが、いずれも栄町交差点の南西側に形成されたマーケットである「栄楽天地」を撮影したものである。左の写真は、画面右の路地の軒越しに見える赤れんがの外観の西洋風の建築が、広小路通北側に所在した野村銀行名古屋支店であることから、栄町交差点南西の地区から北方を撮影したものと考えられる。右の写真は、店頭のアップで情報が少ないが、左の写真と同じ意匠の提灯が使用されているので、同じマーケットのなかにある店舗と考えられる。



**栄楽天地の位置**  
 出典: 国土地理院空中写真(米軍撮影1946)を加工

参考文献 佐藤美弥「ローカル人文知の応用によるIFコンテンツの活用: 国立国会図書館所蔵モージャー氏撮影写真資料を素材に」『デジタルアーカイブ学会誌』9(2), 2025年

焼け跡からの再出発——カラー写真で復元する戦後の名古屋  
**市役所・県庁と名古屋城**



**名古屋市役所愛知県庁（愛知県）**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

1933年（昭和8）に完成した名古屋市政舎（左）と1938年（昭和13）に完成した愛知県庁舎を南西方向から撮影した写真。空襲の標的になるのを防ぐ防空迷彩のため、黒色でまだらに塗装されている。いずれも2014年（平成26）に国の重要文化財に指定された。



**名古屋観光ホテル（鳥瞰）（愛知県）**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

広小路通の納屋橋東側にある朝日新聞名古屋支社の塔屋と思われる地点から北東方向を撮影した写真。広小路通北側の名古屋観光ホテルが見えるほか、度重なる空襲で焼失した街並みと新築された建物、遠景には市役所、県庁の建物がみえる。



**名古屋城石垣と城壁（愛知県）**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

名古屋城内西之丸から表二之門方向を撮影した写真で、表二之門の奥に東南隅櫓が見える。空堀のなかには農作物を栽培するための畝がみえ、名古屋城内の空き地も食糧増産のために使用されていたことがわかる。



**名古屋城表二之門とMosier氏（愛知県）**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

名古屋城表二之門の門扉に手をかけるモージャー氏。  
 表二之門は空襲の被害を免れ、戦後、文化財保護法にもとづき国の重要文化財となった。



**名古屋城の焼け跡（愛知県）**  
 1946～1947  
 国立国会図書館デジタルコレクション

名古屋城の天守と本丸御殿は、1930年（昭和5）に国宝保存法により国宝に指定された。1945年（昭和20）5月14日の米軍の空襲により、天守、本丸御殿などが焼失した。写真が撮影された時点では、天守台の石垣のみが残されている。



モージャー氏撮影写真資料を利用した  
 デジタルアーカイブ「戦後の名古屋」

# 犬山橋付近

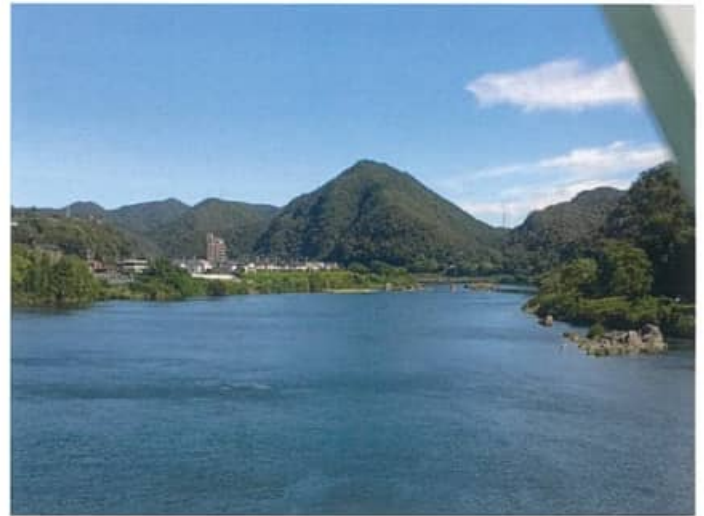


木曾川犬山橋付近(愛知県)

1946~1947

国立国会図書館デジタルコレクション

国立国会図書館では「長良川と金華山」とされているが、犬山橋付近から木曾川の上流方向を撮影した1枚である。現在、犬山橋を走行する名鉄犬山線の車窓に同じの風景がみえる(右写真)。長良川や木曾川の行楽地、別荘地も接収され、GHQ将兵の娯楽施設として利用されたのである。



木曾川犬山橋付近

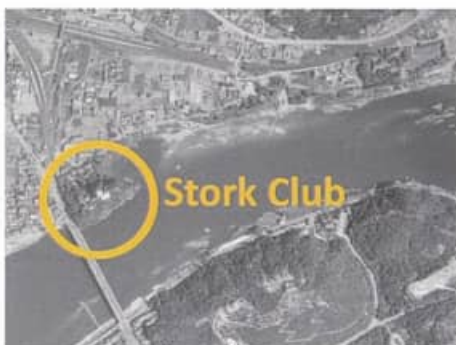
2025年 佐藤美弥撮影



城山荘遠景(岐阜県)1946~1947

国立国会図書館デジタルコレクション

犬山橋の北詰にそびえる岩山である城山に建設された施設。占領期には、STORK CLUBと呼ばれるGHQ用の娯楽施設として使用された。



出典:国土地理院空中写真(1969)を加工



犬山橋と城山

2025年 佐藤美弥撮影

城山は、名鉄犬山線の終点である新鶴沼駅からほど近い。GHQは、名古屋や各務原飛行場に置かれたキャンプギフからアクセスのよい、岐阜や鶴沼(現各務原市)の行楽地を接収し、娯楽施設として活用した。



占領軍クラブSTORK CLUB入口の看板

1946~1947

国立国会図書館デジタルコレクション

看板が掲げられた城山の岩盤は現在もそのままの姿を残している。(右、2025年撮影)



# 名古屋の史跡見て歩き

## ちらっと東海道 in 名古屋——有松・鳴海・熱田(宮)

### 名古屋市内の旧東海道を歩いて文化と歴史を探る

ここでは、名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科で開講された「国内フィールドワークE」（2025年）の授業で実施した調査成果を公開する。

この授業では、受講生が実際に名古屋市内の有松から熱田までの旧東海道を歩きながら、道すがらにおいて各自が興味を抱いた文化財や景観などを撮影し、写真を地図上にマッピングする作業を実施した。

また、それぞれの説明も、受講生が様々な情報を頼りに作成している。

もっとも、今回作成したデジタルアーカイブでは旧東海道の文化財をすべて網羅したものではなく、情報源としては完全なものではない。その意味で、まさに「ちらっと」見た文化と歴史を紹介したものである。

また、必ずしも歴史学の観点からの確実な情報には基づかない説明もあるかもしれない。しかし、大学生の視点で直感的に関心を抱いたモノにはどのようなものがあるのか、彼らが率直にどのように感じたかが示されることにより、世代をまたいだ歴史文化の継承について思索する上で相応の意義があるものと考えている。



### 竹田庄九郎之碑

竹田庄九郎とは、江戸時代初期の染工であり、尾張国(愛知県)で「有松・鳴海絞り」の技術の開祖である。名古屋城の改修工事で九州から来ていた人々が着用する絞染衣類にヒントを得て、九九利染の手業を考案した。竹田庄九郎は技法の生み出しだけではなく、村全体をあげて有松絞りに取り掛かることで、有松絞りは全国で有名となった。括り手法は100種にもおよび、現代には75種以上が伝承されている。



### 丹下町常夜灯

東海道の整備された宿場であった鳴海宿の西の入り口となる丹下町に建てられた常夜灯。表側に彫られている「秋葉大権現」とは、静岡県秋葉山を本山とする火事を防ぐ神さまで、旅人や宿場の人々の火災厄除を祈願する火防神として大切にされている。裏側には設置された年である「寛政四年」（1792年）と彫られている。鳴海宿の常夜灯は東側にも残っており、東西両側とも残っていることはとても貴重とされている。



### 有松東町布袋車

有松に3つある山車のうちの1つであり、この布袋車は1674年(延宝2)からおよそ350年間大事に曳き繫がれている。高さはおよそ6mあり、間近で見るとその迫力がより伝わってくる。毎年10月に行われる有松山車まつりにおいて実際に公道で曳かれ、山車のからくり人形がお囃子に合わせて動く様子を見ることができる。この山車の他にも、西町神功皇后車と中町唐子車があり、毎年1台ずつ定期的に有松山車会館に展示され、見学することができる。



### 圓道寺

圓道寺は、約400年前に開創された曹洞宗のお寺。境内に入ると、すぐ右手に見える本堂の上から3匹の猿が出迎えてくれる。これらの猿は左からそれぞれ「見ざる」、「言わざる」、「聞かざる」のポーズを取っている。ご本尊は青面金剛明王で一般的には「庚申さま」と呼ばれており、先述の3匹の猿は、どれも青面金剛明王の使いの猿になっている。圓道寺は何度か名称が変わっており、開創時の「猿道寺」から「地藏堂」、「庚申堂」を経て、現在の「庚申山円道寺」という名前になった。開創時の「猿道寺」という名前の通り、先ほどの3匹の猿以外にもたくさんの猿がいるので、探しながら歩いてみるのも楽しいかもしれない。

## 旧東海道 道標



熱田区伝馬町に建てられた旧東海道を示す道標。

「東北 さやつしま  
同みのち 道  
南 寛政二庚戌年  
西 東 江戸かいとう  
北 なこやしそ道  
北 南 京いせ七里の渡し  
是より北あつた御本社武丁道」

と刻まれている。  
同じ場所に、現在は熱田神宮に  
移った摂社上知我麻神社の跡もあ  
る。



## 裁断橋址

裁断橋は、旧東海道の精進川（別名三途川）に  
架かっていた木橋の跡地。死者を閻魔大王が裁  
断する場として、この橋の名前が付けられたと  
いう説がある。

また1590年（天正18）、小田原の戦いに出征し  
た堀尾金助という人物が病で倒れ帰らぬ人とな  
り、裁断橋まで見送った母が翌年に橋を架け替  
え、33回忌にもう一度架け替えが行われたとい  
う実話があり、母の持つ子への思いが語り継が  
れている。



## 道標石柱 東海道・大府行縣道

東海道と「大府行縣道」の交差点に置かれた道標。大府行  
縣道は有松東海道と桶狭間を結ぶ道で、かつては「分れ  
道」と呼ばれていた。1928年（昭和3）に改修されて大府  
行縣道となり、東海道との交差点に道標が設置された。現  
在は交差点よりも東側、有松郵便局前に設置されている。



## 七里の渡し

東海道五十三次において、宮宿（愛知県名古屋市熱田区）と桑名宿（三  
重県桑名市）間を結ぶ海路として使われていた官道。「七里」の名は  
両地点間の距離に由来し、江戸時代の宿駅制度以前、鎌倉・室町時  
代には既に使用されていたとされる。

現在は「宮の渡し公園」として一体が整備されており、常夜灯や時  
の鐘と共に公園の一部となっている。七里の渡しの先端からは堀川  
と対岸の街並みを一望することができる。



QRコードを讀込んで、  
デジタルアーカイブへ！

# 名古屋の史跡見て歩き

## 太閤秀吉で中村を盛り上げる——中村公園とその周辺

絵はがきをてがかりに地域の歴史を考える

ここでは、2026年2月に名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科で開講された「CTプロジェクトC」の成果を紹介する。  
2025年度にデジタル化した名古屋市博物館所蔵資料のなかに、中村地区で撮影された絵はがきが含まれていた。これに個人蔵の絵はがきも合わせて調査対象とし、絵はがきに印刷された内容をてがかりとして、戦前期の中村地区の歴史を考えた。その結果、かつて農村であった中村の地を、地元の人々が時代の流れに合わせて発展させようとしてきた動きがみえてきた。  
この授業では、調査の結果をデジタルアーカイブにまとめた。その一端を紹介する。

### 中村公園と豊臣秀吉ゆかりの史跡

1883年（明治16）3月25日、愛知県令国貞彦平は、愛知郡上中村戸長木村喜代二をはじめとした地元の人々の案内の案内により、同村字木下屋敷にある豊臣秀吉の出生地と言われていた竹藪を視察し、「豊公誕生之地」の標柱を建設した。そして、地元有志と県が一体となり、豊臣秀吉を祀る神社を建立し、顕彰することを約束した。地元の人々は同年7月に県に豊国神社創建を出願し、翌月その願は聞き届けられた。

1885年（明治18）1月18日、豊国神社正殿が完成したが、その後建設は一時中断した。1897年（明治30）、豊臣秀吉三百年祭にあたって、愛知県選出代議士や名古屋市長が、京都の豊臣墓所の整備に合わせて出生地の顕彰も行うことを力説し、地元選出の県議会議員であった吉田高朗が中村旧跡保存会を設立して、1901年（明治34）に県会に県営事業とすることを提案、決議された。同年に県の公園としての中村公園が開設された。

参考文献 横地清『中村区の歴史』愛知県郷土資料刊行会、1983年



QRコードを  
読み込んで、  
デジタル  
アーカイブへ!



### 絵はがき 豊公誕生の地

名古屋市博物館蔵

豊国神社の東側には、豊臣秀吉が生まれたとされる場所が伝えられている。写真左側に写る「豊公誕生之地」と刻まれた記念碑は、1911年（明治44）に、当時の県知事・深野一三の直筆をもとに建立されたもので、現在も現地に残されている。絵葉書が作られた当時には、柵で囲われていた生誕の地とされる一帯は竹林となっていたが、現在では円形に石が敷かれ、その中央に瓢箪形の石が据えられている。この敷石がされた時期についてはわかっていない。

敷石と瓢箪の石像に加えて2022年には、名古屋太閤ライオンズクラブの寄贈により、新たに金色の瓢箪型モニュメントが設置された。



現在のようす（2026年撮影）



## 中村公園



### 絵はがき 中村公園

#### 豊国神社前大鳥居

名古屋市博物館蔵

豊国神社の大鳥居を撮影した絵はがき。はがきの表面の形式から1933年（昭和8）から1944年（昭和19）の間に作成されたものであると考えられる。

この大鳥居は、中村公園から南に伸びる参道が太閤通りと交差する交差点に建設されている。1929年（昭和4）に完成したものである。1921年（大正10）に愛知郡中村が名古屋市に合併したことを記念して、旧中村村民が奉納したものである。名古屋高等工業学校の土屋純一が設計した鉄筋コンクリート造のもので、大林組が施工した。写真を見ると参道を軌道が走っている。これは、名古屋土地株式会社が敷設し、後に中村電気軌道が運営していた、名古屋駅近くの明治橋から延びる路線のものである。



現在のようす（2026年撮影）



現在のようす（2026年撮影）



# 全体マップ

## 絵はがき 大正天皇 御手植之松 名古屋市博物館蔵



現在のようす  
(2026年撮影)

中村公園内に植えられている松の木を写真が使われた絵はがき。この松は1910年(明治43)に当時親王であった大正天皇が植えたものである。現在は絵葉書が撮影された当時のような柵は取り除かれ、説明書きがついた看板を設置している。



現在のようす (2026年撮影)

## 絵はがき 中村公園内豊公銅像 名古屋市博物館蔵

中村公園は古くから豊臣秀吉生誕の地として伝えられ、公園に隣接する常泉寺境内に豊臣秀吉像と豊公産湯の井が所在している。現在は絵はがきと同じ場所にあるが、絵はがきの戦前期の像は、戦時中の金属供出によって失われ、現存する像とは別のものである。また、豊公産湯の井は都市開発に伴って一度地下水が枯渇したが、現在は再現されている。かつては絵はがきに見られるような石製の柵で囲まれて井戸の水に触れることはできなかったが、現在柵は撤去され、井戸の水は寺の手水として用いられている。柵の一部であった「豊公御誕生井」と刻まれた石は、現在も設置されている。

## 絵はがき 清正公銅像 名古屋市博物館蔵

現在の妙行寺にある加藤清正公銅像は鎧兜姿であるが、かつては衣冠束帯姿の像であった。衣冠束帯姿の像は建立時期、撤去時期ともに不明であるが、戦前期に発行されたと思われる絵はがきではこの姿の銅像が確認されている。清正公銅像の足元にある台座には「三百年記念」と刻まれている。現在の銅像は1960年(昭和35)に清正公350遠忌の際建てられたものであり、衣冠束帯姿の銅像を支えていた台座は、銅像の足元左側に移されている。像自体の設置場所は先代から変化しておらず、正面の山門からその姿をうかがうことができる。

## 絵はがき 中村公園 個人蔵

中村公園の入り口付近には、裏に「明治三十六年四月 愛知縣」と刻まれた、公園名を示す碑が建てられている。中村公園は1901(明治34)に愛知県の管轄する公園として整備されたため、この石碑は開園まもなく造られたものである。絵はがき内では写真左に当該石碑が確認できるが、同じものが現在も公園入口左手に残されている。現在では正門に石灯籠と鳥居が建てられ、豊国神社へと続く道へ架けられた橋はその床が木製からコンクリート製に改築されているなど一部変化がみられるものの、現地では今も当時の面影を感じさせる景色を目にすることができる。



現在のようす  
(2026年撮影)

かつての台座の一部  
(2026年撮影)



# 名古屋の史跡見て歩き

## 中村の遊園地、名古屋花壇の誕生

### 名古屋花壇（中村温泉パラダイス）

1928年（昭和3）、名古屋土地株式会社が現在の名古屋市中村区に開園した複合型娯楽施設が「名古屋花壇」である。近隣にあった中村遊郭の客層を主な対象として朝風呂を提供していたことから、浴場機能に着目した呼称である「中村温泉パラダイス」や「新宝塚温泉」とも呼ばれていた。

開業前に名古屋土地株式会社が作成した文書では、東京における浅草や多摩川遊園地、大阪における宝塚や新世界のような遊園地を企画したいと述べている。その立地は中村遊郭、秀吉や清正の生誕地である中村公園にほど近い絶好の地であるとアピールしている。

施設内には浴場のほか、屋内運動場、演芸場、映画館、子供用サーキットなどが設けられ、家族連れを含む幅広い層を意識したものとなっていた。また、場内の各所には「美顔術」や「美顔の素」と記されたのぼりが掲げられており、女性客を意識した宣伝広告が行われていたことがうかがえる。

その後、1937年（昭和12）には、名古屋花壇の建物は新設された中村区役所の仮庁舎として使われている。つまり、名古屋花壇は10年たらずで営業を終えているのである。

### 名古屋土地株式会社

名古屋花壇を経営していた名古屋土地株式会社は、1911年（明治44）に中村区出身の実業家であった吉田高朗らが設立した企業である。都市化が進み荒れはじめた中村の農地を買収し、新しい市街地を開発しようという計画であった。同社は、1913年（大正2）に名古屋駅近くの明治橋から中村公園までの電気軌道を開業した。また、1923年（大正12）までに、それまで大須にあった遊郭が同社が売却した中村の土地に移転し、中村の市街化が進んだ。名古屋花壇はこうしたなかで開業したのである。

参考文献 横地清『中村区の歴史』愛知県郷土資料刊行会、1983年  
横地清『中村区歴史余話』中日出版社、1992年  
『中村区誌』中村区制施行50周年記念事業実行委員会、1987年



QRコードを  
読み込んで、  
デジタル  
アーカイブへ!



絵はがき  
名古屋花壇 外観正面  
名古屋市博物館蔵

名古屋市中村区にあった複合娯楽施設『名古屋花壇』の正面外観の絵はがき。演芸場や映画館、屋内運動場や大食堂、メリーゴーランドなどが備え付けられ、ファミリー層がターゲットとなった。また、銭湯も備え付けられ、周辺にあった中村遊郭の客に朝風呂を提供する狙いもあった。別名『中村温泉パラダイス』。

建物内ののぼりには『美顔術無料実演』と書かれていて、女性向けのサービスも展開していたことが窺える。また、写真右側には神社らしきものが設置されている。

右側のバスの行き先には『名古屋花壇』と書かれており、直通のバスがあったこともわかる。



現在のようす（2026年撮影）



絵はがき  
屋内大運動場  
名古屋市博物館蔵

体育館のような空間に、ブランコや滑り台などの遊具が設置されている。床は全体が板張りで、大きく開放的な窓が印象的である。

写真には親子連れと思われる人々が多く写っており、この施設は比較的幼い児童をターゲットにしていたことが伺える。

絵はがき  
大余興場  
名古屋市博物館蔵

6人の女性が傘を用いたパフォーマンスを行っており、場内は見物の客で埋まっている。女性らの持つ傘や舞台には「美顔の素」と書かれている。化粧品店の広告であろう。



絵はがき  
大浴場  
名古屋市博物館蔵

浴槽は円形で、写真のように男性15人ほどで使用してもかなり余裕が感じられる程に大きなものであった。建物そのものも外壁がゆるやかな半円を描くように設計されており、床や壁はタイル張りであった。

# 現代名古屋の絵はがき——名古屋市博物館所蔵資料から 高度経済成長の時代と名古屋

## 名古屋市博物館との連携

「名古屋をフィールドとしたデジタル・ヒューマニティーズの創生」では、名古屋の歴史・文化に関する資料の活用という観点から、名古屋市博物館との連携のもと、2025年度に名古屋市博物館所蔵資料の絵はがきのデジタル化を実施した。当年度は、学生の協力を得て、中村公園を撮影した絵はがきなど約50点のデジタル撮影を実施した。こうしたデジタル化の作業は研究者独自の視点から研究・教育を進めている本学と豊富な地域資料を有し、保存・活用を進めている市博物館というそれぞれの特色を生かした連携事例として、今後も継続的に進めていきたいと考えている。

ここでは、今回デジタル化した絵はがきのなかから、高度経済成長期の時代の名古屋の風景がわかる絵はがきを紹介する。



**絵はがき 観光名古屋 タウ**  
1950年代～1960年代 名古屋市博物館蔵

「観光名古屋」と題された絵はがきセットを収納する紙製のケース。表紙には「昔を偲ぶ名古屋城」のキャッチコピーと1959年（昭和34）に外観は空襲で焼失する以前のままに、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造の不燃建築で再建された名古屋城が描かれている。

セットに含まれている絵はがきの被写体を検討すると、1950年代後半から1960年代前半に作成されたものと考えられる。戦災からの復興が進み、道路や地下鉄が整備されているようすがわかると同時に、高度経済成長にさしかかりさらに都市の姿が大きく変貌する以前の名古屋の都市景観を知ることのできる資料である。



**絵はがき 名古屋 上空より見たる中心街**  
1950年代～1960年代 名古屋市博物館蔵

久屋大通公園に建設された名古屋テレビ塔を中央に、南西方向を撮影したものである。久屋大通は戦災復興計画により100mの幅で建設された。名古屋テレビ塔はテレビ放送の開始を前にして、1954年（昭和29）に完成した日本初の集約電波塔である。2022年（令和4）に国の重要文化財に指定された。当時の名古屋の風景をみると、広小路通沿道にこそ高層ビルが建設されているものの、そのほかの地域では低層の建築がほとんどであったことがわかる。



**絵はがき 名古屋 広小路通り**  
1950年代～1960年代 名古屋市博物館蔵

広小路通りと伏見通りの交差点を東側から撮影したものである。北側には、神戸銀行、第一銀行などのオフィスビルが並ぶようすがみえる。南側の角には、中華料理の平和園がみえる。その屋根にはニッポンビールのネオンサインがある。ニッポンビールは、1949年（昭和24）にエビスとサッポロを改めたブランドで1957年（昭和32）まで使用されたものである。



**絵はがき 名古屋 栄町 地下鉄入口**  
1950年代～1960年代 名古屋市博物館蔵

戦前期から市営交通は市電と市バスが営業していた。戦後には戦災復興計画の一環で地下鉄路線も計画され、1957年（昭和32）11月に名古屋・栄町間の地下鉄が開業した。地下鉄入口はすっきりとしたデザインで「地下鉄」のネオンサインが掲げられていた。なお、栄町駅は1966年（昭和41）に栄駅に改称された。



**絵はがき 名古屋 市立東山動物園全景**  
1950年代～1960年代 名古屋市博物館蔵

1937年（昭和12）それまで鶴舞公園にあった動物園が、新たに東山に開園した。同年、植物園も開園している。太平洋戦争末期には動物の処分や観覧の停止が行われ、戦後、1946年（昭和21）に再開園した。現在のようには植物園と一体の東山動植物園となったのは1968年（昭和43）のことである。



**絵はがき 名古屋 名古屋港の全望**  
1950年代～1960年代 名古屋市博物館蔵

1907年（明治40）に開かれた名古屋港の開港当初からの主要施設で主に外国との貿易に使用された中央、東、西のふ頭を南東方向から撮影したものである。この地域は現在、ガーデンふ頭となり、名古屋港水族館などがあり市民の憩いの場となっている。

